

結婚の危機 (上)

冷えた夫妻の結婚は、それほど悪いものではありませんでした。しかし、とくに良いわけでもありません。確かに一緒に住んでいたし、それなりにやっていました。お互いに自分の責任を果たしていたのです。彼らは喧嘩もそれほどありませんでした。でも、実際彼らは結婚がこれ以上のものであることを望んでいたのです。かつては、大きな夢がありました。しかし、何度も落胆して、ふたりの関係にエネルギーを注ぐことをあきらめてしまったのです。会話は表面的で、お金、子供、天気のことくらい。もはや、心から分かち合うことも、絆を感じることもありません。親密さを妨げる、壊すことが出来ない壁が、二人の間に立ちはだかり、彼らは行き詰まっています。時折、教会で理想的な結婚について語られると、罪責感を感じます。でも、どうしたら良いのでしょうか。

ばくはつ夫妻の結婚は、惨めでした。しかし、それは極秘でした。彼らは喧嘩し、またそれを隠すことに多くのエネルギーを使っていました。何故なら、誰もが牧師夫妻は何事もうまく行っているはずだと思うから。ばくはつ夫人は、深刻な怒りの問題を、子供のころから引きずっていましたが、夫は、妻の必要を取り扱わなかったため、マグマとなっていたのです。よく、日曜日の礼拝の直前に、物事が爆発しました。ばくはつ牧師は、力なく説教壇に上がりません。助けを求めたくても、牧師がどこで安全に心をあらわに出来るでしょう。ばくはつ夫人は、自分は何の助けも受けたくないけど、夫は確かに変わる必要があると思っていました。そして、状況はますます深刻になっていったのです。それが、子供たちや教会に、深い損傷を与えていたのです。そしてキリストに勝ち取るはずの近所にも敵の思惑どおりの影響を与えていたのです。いったいどうすることが出来たでしょう。

多くのクリスチャンリーダーは、まだ目覚めていません。多くは10数年前と同じことをしています。そして、日本における結婚が危機的状況であることに気づいていません。毎年離婚数は更新しています。この10年で日本の離婚数はおよそ2倍にはねあがりました。去年は567,812人が結婚に見切りをつけたのです。2分ごとに1組、1日に777組が離婚しているのです。今、日本で40%近くの結婚が離婚におわります。もちろん、何年も前にこれが起こると誰もが予想できたでしょう。自由と個人主義が広まり、しかも日本は世界の産業国家の中で最も結婚に不満をもっている国のひとつです。誰もがこの状況を予想できたはずですが、そうしたのでしょうか。

離婚はさらに増えるでしょう。——人々はもっと自由になっているから。2001年、日本はやっと夫婦の虐待問題を認識し、この問題と戦う法律を制定しました。産業国家の中で最後に腰をあげたのです。西洋諸国より何十年も遅れた対応でした。夫婦虐待の問題はどれほど深刻でしょう。1999年の政府の調査によると、5人に一人の妻は肉体的虐待を体験し、20人に一人は、命に関わる暴力を体験しています。最近おこなった結婚セミナーで、一人の婦人が私に言いました。「夫から20年間にわたり残忍な行為を受け、もうわらをも掴む思いです。」と。結婚初期、彼女が生まれたばかりの息子に授乳しているとき、ガラスの扉に投げ飛ばされ、割れた破片のシャワーが彼女と赤ん坊に降りかかったのです。その赤ん坊は成長し、今思春期の後半となり、父親を殺したいと思っています。この家族に暴力が跳ね返り、この妻が逃げ出すのは当然のことでしょう。

離婚はさらに増えるでしょう。——今日の若者はわがままで、結婚するにはあまりにも未熟です。ハイテク娯楽で、若者は人との付き合いが苦手となっています。（日本の引きこもりは世界でも類をみません。）たいした理由もなく多くの人が結婚しているのを懸念します。今日、人々はなんとなく結婚しているのです。「ただこうなってしまった」「他に選択肢はなかった」「二人とも年頃だったから」と。現代の若者は関係を築いたり、ロマンスを持続する方法がわかっていないようです。セックスレス夫婦は、いまやふつうで、30代の女性自身の読者55%は夫と肉体関係がないことを認めています。

ある団体は、結婚の必要に的を当てはじめ、あるところは、ただ精神医学治療で対応し、他のところはかなりおかしいものもあります。多くの神社や祭りで日本中にありますが、川崎市の金山神社は、男根を祭っています。参拝者は「夫婦和合」をもたらすとされるこのシンボルに触り、祈願するのです。しかし、教会は、真の答えをもって踏み出しているでしょうか。

恐らく、私たちは、離婚や結婚の混乱が、社会に、そして特に子供に与える影響の重大さに気づいていないのでしょう。現在、954,900の父親不在の家庭があり、ほとんどの母親は、経済的に感情的にやっとなんとかやっている状況です。数ヶ月まえ、結婚するカップルのカウンセリングをしました。二人とも20代半ばで、すでに離婚経験がありました。このカウンセリングに、彼女の2歳の娘が一緒にいました。彼らに会ったとき、私はすぐに好感をもちました。また、彼らが過去において苦しんだ痛みも感じました。（かつて離婚した人が、その経験を「身を引き裂かれるよう」と表現しました。）カウンセリングで彼らにIコ

リント 13 章（愛の章）を読んでもらいました。小さな女の子が二人に挟まれ 3 人が寄り添って座り、彼らは生まれて初めて生ける神の言葉に触れました。彼らが一緒に聖書に手を置いたとき、私はどれほど多くの人々がこのような機会を必要としていることかと思いました。

この国は、聖書がどこにでもあり、ほとんどの人がどこかで聖書に触れる機会を与えられたことでしょう。しかし、わずかな人しか御言葉を人生に、痛みに、必要に結びつけていません。しかし、確かに教会が、結婚の危機を感じ、この必要に応えるために神の言葉をひきだせるのです。確かに教会こそが、この必要がくることをずっと前に察知して、それに応えることができたのです。確かに教会は、もし結婚の必要がなおざりにされたら、次に何が起こるのか予想できるのです。残念なことにこれらの言及に対する応答はまだされていません。しかし、願わくば早急にできますように。なぜなら、私たちはもうずっとまえにそうすべきだったのですから。

（訳:美湖純子）